

『枕草子』「は」型類聚章段と和漢の類書の部類標題との比較・対照

——三巻本・前田家本と『藝文類聚』『倭名類聚抄』を中心に——

中島和歌子

1. 前稿の補足と本稿のねらい

1.1. 前稿のまとめ

前稿『枕草子』初段と和漢の類書的首巻部類標題の関係についての覚書(『和漢古典学のオントロジ』1, 平16・3)でも述べたように、『枕草子』と類書の関係についての先駆的な研究としては、上野理氏「枕草子初段の構想と類書の構造」(『国文学研究』50, 昭48・6)がある。氏は初段の構想の変遷について、作者はまず類書の巻頭に当る「天(天空)は」の執筆を企図したが、主題の「天」を類書首巻の「天(天象)部」全体に拡大し、次の「歳時部」の要素を加え、さらに類書末尾に当たる「木・草・鳥・虫」も加えて、「自然物」全体を表現し、「は」型の「自然物」類聚章段の序章とした、と推測された。また、『綺語抄』『初学抄』は「歳時」の中に朝以下の時間帯を含むので、清少納言の座右の類書は歌枕であろうとも述べられた。

類書についての言及は無いが、日向一雅氏「枕草子の聖代観の方法—「陰陽の變理」の観念を媒介にして—」(『国語と国文学』70—9, 平5・9/『源氏物語の準拠と話型』平11, 至文堂)も、初段が「天象」と「歳時」に関する言葉で占められていることに注目し、初段は天地自然の調和と四季の理想的な運行を典型化して描いており、これは古今集の四季の部立が先蹤であった、また、初段や3段では天地人の調和に満ちた泰平の世界が語られているが、その聖代観に実体を与えるものとして中宮定子を中心にした知的で華やかな後宮の様子を描く日記的章段があった、と述べられている。高橋亨氏「歳時と類聚—平安朝かな文芸の詩学にむけて—」(『国語と国文学』76—10, 平11・10)の一部にも、『古今集』の政教主義的な四季(歳時)観が、初段を始めとする『枕草子』の表現の前提となっているという、同様の指摘がある。なお、日向氏は、「紫立ちたる雲」が聖代に現れる瑞雲(慶雲)の紫雲であるということも、聖代観の根拠にされていた。

これらを承けて、前稿では、主に次のようなことを述べた。なお、本文及び章段番号は小学館『新編日本古典文学全集』に拠る。

- *初段には「人」も確かに描かれており、聖代における天地人の調和、一年(四季、2段は暦月ごと)そして一日の順調な時のめぐり、それぞれに相応しい天地の自然の美、その中での「つきづきし」い人の営みが描かれている。「光り」と「闇」、「をかし」と「あはれ」、さらには「わろし」といえるものすべて、森羅万象が凝縮されている。
- *よって、初段は「は」型類聚章段や日記的章段だけでなく、「もの」型章段を含む『枕草子』全体の序と考えられる。
- *『古今集』などは「歳時部」(四季)から、中国の類書などは「天部」から始まるが、『枕草子』は仮名散文であることによって、どちらかだけではなく、どちらをも冒頭とすることが可能だった。初段は歳時部と天部、四季と天、和と漢の両世界観が融合している。ほとんどの場合どちらか一方しか指摘

されないが、両方ともなのである。

- * 四季（四時）重視は、『古今六帖』のような類題和歌集はもちろんのこと、『千載佳句』や、『和漢朗詠集』『本朝麗藻』といった『枕草子』前後の詩（句）集でも見られる。特に後二書は独立した「天部」を持たず、比較すると、初段で四季すべてに「天」を配当した『枕草子』の漢志向が際立つ。（『和漢朗詠集』は歌集でもあるが。）
- * 『礼記』「月令」も、『古今集』と同じく、『枕草子』の初段や2段他との関係があるだろう。
- * 「歳時部」に時間帯を含むのは、平安後期の詩学書『文鳳抄』でも見られ、作者座右の類書が歌学書であったとは限らない。時間帯は『枕草子』以前には『白氏六帖』の「晨夜」や『千載佳句』「天象部」の「曉・夜・閑夜」のみで、むしろ初段が萌芽的な『千載佳句』から平安後期の歌学書・詩学書に至る、日本的な「歳時部」の形成を促した可能性も考えられる。この点からも、類聚編纂物史上、『枕草子』は重要な書だといえる。

なお、以上のことを、次項に掲げた先行研究や、加藤盤斎の『枕草子抄』の初段の注釈を踏まえて、『枕草子』初段「春は曙」の段をめぐって「和漢の融合と紫の雲の象徴性」、『むらさき』41, 平16・12)の2節1・2で再度述べた。ちなみに、「オントロジ」とあまり関係は無いが、新たに追加した点は以下の通りである。

* 初段の四季—時間帯の組合せは、『千載佳句』や『和漢朗詠集』にある。四季—景物—時間帯は和歌の伝統的なもので、春秋の対は『古今集』仮名序、四季揃った例は好忠や惠慶の定数歌序や『宇津保物語』にある。「春の曙」という表現も、春秋優劣論の枠組内や景物との組合せで同時代に見られる。以上いずれも既に指摘されてきたことである。

* 初段には聖代観が表れているが、聖代を担うのは天皇と皇后であり、天皇賛美だけではない。それは、21段「清涼殿の丑寅の隅の」の段の「君をし見れば物思ひもなし」の「君」が、天皇と皇后のどちらかだけではなく、両方を指していることと同様である。

* 初段の「鳥」と「雁」は、「慈鳥」と「雁行」であることがそれぞれ指摘されている。初段の構造や要素だけでなく、取り上げ方にも漢志向が見られるのである。さらに夕陽に向かう「鳥」には、「三足鳥」（「陽鳥」「金鳥」）のイメージもあるか。

* 村上朝の継承は、21段や、101段『千載佳句』編者である天曆期の大江維時の句を利用した清少納言の「早く落ちにけり」を一条天皇が評価）と175段（兵衛の蔵人の『白氏文集』の詩句「雪月花の時」の引用を村上天皇が評価、後半は兵衛の蔵人が洒落を眼目とする和歌を奏上）の符合等々に明らかだが、初段のあり方もその実践の一つといえる。漢詩文と和歌のどちらかだけでなく、どちらをも利用することが評価されている。

* 「紫の雲」は元輔歌を含め村上朝に例歌が急増するが、基本的には瑞雲である。『枕草子』にも、天皇・皇后による聖代の証の他、立坊の吉兆（立后・皇子誕生は既に実現）、弥陀来迎の雲などが当てはまる。紫雲=後の例歌は頼通時代の二首まで見当たらない。また、紫雲=藤花の見立ての歌は多いが、『枕草子』には藤花=藤氏の表現が無いので、それを介しても紫雲=藤花=定子とはならない。なお紫雲=藤花=安子・彰子の有名な例歌がある。

- * しかし、84段「めでたきもの」で紫色を最上位とすることや、『文選』宋玉「高唐賦」序の「朝雲暮雨」の故事から、紫雲=定子と見ることもできる。「朝雲暮雨」は、性愛（陰陽和合）を表すと共に、亡妻や亡母追慕の表現に用いられるからである。また、237段「雲は」でも、直接的もしくは間接的に引かれている。

* 『権記』によると、定子崩御の前日の朝に、凶兆である「不祥雲（歩障雲・白雲とも）」が現れた。

「(朝の) 雲」も294段の「火事」などと同様に、定子の不幸を象徴するものであった。「雲」は多義的であり、吉凶という点で両義的である。それにあえて言及するという点でも、初段は『枕草子』の冒頭に相応しい。「ふさう(不祥)雲」は、147段「名恐ろしきもの」に挙げられている。

*初段は「冬」で終るのではなく、「わろし」の前の「昼になりて、ぬるくゆるびもていけば」に、盤斎が指摘したように陽気の回復が示されており、循環・再生が表現されている。

*『蜻蛉日記』は、『千載佳句』の利用や、「曙」の「雲」を描いた点でも、『枕草子』への影響が考えられる。(288段に「爛柯」をよみこんだ道綱母の歌が引かれている。)

なお、前稿の口頭発表時に、安保博史氏より、初段が春の朝の日の光が増していく様子から始まることは、三田村雅子氏が指摘された日記的章段における「日ざし」による宮仕え賛美の方法に通じるのではないかと、という貴重かつ尤もなご指摘をいただいたが、『むらさき』においても示唆するに留めて明記しなかった。おのずと伝わると思っていたことである。なお三田村氏の「枕草子の表現構造—「日ざし」と宮仕え賛美と—」(『中古文学』25, 昭55・4/『枕草子 表現の論理』平6, 有精堂出版)のほぼ同時期に、安藤享子氏も「積善寺供養章段における読者への弁明の文をめぐって」(『岸上慎二先生古稀記念論文集 まくら』昭53・3/『物語そして枕草子』「対読者意識」平14, おうふう)において、260段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」の段の「朝日」が、事実そのままではなく、中宮の様子を華麗に記すための「叙述の方法」であると述べられている。また沢田正子氏「枕草子の春」(『静岡英和女学院短期大学紀要』12, 昭55・3/『枕草子の美意識』昭60, 笠間書院)も、日記的章段が好んで「春の日」を取り上げていることを指摘されている。

つまり、「春」と「天」から始まることは、主に日記的章段に見られる『枕草子』内部の表現論理からも必然的であったことを付記しておく。

1.2. 前稿に関わる他の先行研究

その後管見に入った、主に『枕草子』の初段の特徴や分類意識に関わる参考文献を、ここにまとめて挙げておきたい。これら以外に、『和漢朗詠集』など各類聚編纂物の注釈書類の解説もある。

①新井栄蔵氏「古今和歌集四季の部の構造についての一考察—対立的機構論の立場から—」(『国語国文』41—8, 昭47・8/日本文学研究資料叢書『古今和歌集』昭51, 有精堂出版)。『古今集』の各季が「歳時部—景物部—歳時部」という配置になっており、「天象」が「歳時」にも「景物」にも含まれている、という指摘がある。高橋氏が、春歌の首尾に「歳時」や「天」の歌があり、間が「景物」の歌であると見られていることは、前稿で紹介した。「歳時意識による枠どり」は新井氏の指摘に通じるが、再録した『古今六帖』の部立との対応から逆照射された点が新しい。

②平井卓郎氏「白氏六帖を媒介としての古今六帖私考」(『国語と国文学』32—7, 昭30・7/『古今和歌六帖の研究』「古今和歌六帖の組織」昭39, 明治書院)。『北堂書鈔』『藝文類聚』『初学記』等の分類法の共通性についても言及がある。『古今六帖』は、契沖や山本明清が説明したように、「天地人の三才」に「草虫木鳥」を添えたのが輪郭だが、「四時」は「歌の本とするところ」なので、第一帖は「天象」の前に「歳時」を置いた、と述べられている。「山」の部の「やま、山どり、さる、鹿」など、池田氏も指摘された(後掲B)『古今六帖』の項目の排列の特徴である「類推的連想的性格」は、「……池・浦・珠・玉・珪璋・金・銅……」などのように、元になった『白氏六帖』にも見られる、『白氏六帖』は「主知的合理的性格」との「相反する両面の性格」を備えている、という。後掲Bと同様に、次のような『十卷本倭名抄』と『古今六帖』の部門分類項目等の比較もある。

「天地部」=第一帖「春・夏・秋・冬・天」、第三帖「水」、第二帖「山・田・野」

- 「人倫部」=第二帖「人」
- 「居所部」=第二帖「都・田舎・家」
- 「舟車部」=第三帖「水」, 第二帖「人」
- 「布帛部」=第五帖「錦綾」
- 「装束部」=第五帖「服飾」
- 「調度部」上下=第二帖「仏事」「家」, 第五帖「服飾」「色」「錦綾」
- 「羽族部」=第六帖「鳥」
- 「牛馬部」=第二帖「人」(牛・馬)
- 「虫豸部」=第六帖「虫」
- 「草木部」=第六帖「草」「木」

- ③野村精一氏「光源氏とその“自然”」(阿部秋生氏編『源氏物語の研究』昭49, 東京大学出版会)。高橋氏も指摘された「は」型類聚章段の、『宇津保物語』吹上・下の「山は」や、尚侍(初秋)の節会定めとの類似が指摘されている。
- ④三田村雅子氏「枕草子誕生—類聚の草子へ—」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊』1, 昭50・2/『枕草子 表現の論理』平6, 有精堂出版)。③と同様の類似点・相違点を指摘されている。また、四季—景物—時間帯が好忠や恵慶の定数歌の序や『宇津保物語』楼の上・上の弹琴論に見えること、自然描写の自立に初段の達成があることも指摘されている。ただし、序という共通点も注目すべきだろう。
- ⑤鈴木日出男氏「年中行事と歳時意識」(『国語と国文学』64—5, 昭62・5/『古代和歌試論』平2, 東京大学出版会)。
- ⑥大洋和俊氏「枕草子の「時間」—正暦期日記的章段群攷—」(『静岡英和女学院短期大学紀要』23, 平3・2), 「枕草子の「時間」—長徳期日記的章段群攷—」(『日本文学論究』50, 平3・2)。『枕草子』は時間性の欠如が指摘されるが、「夜」など詩歌の時間を取り込んで独自の時間意識を持つことが述べられている。初段の時間帯への注目は、このこととも関わるのではないか。
- ⑦三木雅博氏「『和漢朗詠集』の構成」(『和漢朗詠集とその享受』平7, 勉誠社)。うち全般についての論の初出は、「『和漢朗詠集』の部立の構成に関する考察—主として『古今集』の構造との関連において—」(『文学史研究』33, 平4・12)。
- ⑧三木雅博氏「『千載佳句』の部門の構成に関する考察—冒頭の四時部を対象として—」(『講座平安文学論究』第9輯, 平5, 風間書房/『和漢朗詠集とその享受』平7, 勉誠社)。冒頭の部名「四時」が『白氏文集』中の詩語であることや、部門の構成の『古今集』との近さも指摘されている。なお、『千載佳句』第二の部名「時節」は、『口遊』の第二の門名のほか、『法苑珠林』でも部類標題として用いられている。
- ⑨田坂順子氏「『扶桑集』と三代集」(和漢比較文学叢書11『古今集と漢文学』平4, 汲古書院)。長徳年間に紀齊名が編纂した一条天皇準勅撰詩集の『扶桑集』は、公任の『拾遺抄』などの編纂を視野に入れつつ、『藝文類聚』を範として、「一天, 二歳時上, 三歳時下……」と分類したことを解明されている。
- ⑩山崎誠氏「口遊の原初形態に関する一考察」(『国文学研究資料館紀要』21, 平6・3)。「二中歴篇目—覧並びに項目索引」も付されている。
- ⑪佐伯雅子氏「『本朝麗藻』の分類意識」(『和漢古典学のオントロジ』1, 平16・3)。『本朝麗藻』の巻首・巻尾が現存しない上巻については、下巻の雑題部に対して「四季部」(歳時)と推定されること、

独立した「天部」「天象部」は無く、各季の中に歳時（節日）と景物（天象や動植物）とが混在しており、歳時と景物とを前半後半に分けた『和漢朗詠集』よりも一層勅撰集の排列に近いこと、これら起家の文士や公卿の詩（句）集とは異なり、維時孫の大江匡衡の『江吏部集』は「天部」に続いて『千載佳句』と同じ「四時部」を持ち、藤原明衡の『本朝文粹』は「天象部」「歳時部」というように、漢文学の伝統的な分類を行っていることが指摘されている。

1.3. 池田亀鑑「美論としての枕草子」再確認と補足

ところで、「オントロジ」（知識概念木）や「部類標題」（分類概念語彙）の語は使用されていないが、分類意識や類纂という視点での『枕草子』研究として最も早いのは、池田亀鑑氏の研究である。以下、田中重太郎氏『前田家本枕草子新註』（昭26、古典文庫）の解説を参照して、引用する（ただし現代仮名遣いと新字体に変えた）。Bについては、上野氏が『倭名抄』『古今六帖』ではなく類書である、と批判的に踏まえられているので、前稿で簡単に触れた。本稿では、『前田家本枕草子』の「は」型の一冊の分類・排列の特徴の解明を含め、Bを中心に、これらの指摘の再確認と補足を行いたい。なお、『前田家本』の他の三冊は「めでたき物」「正月一日」「小白河といふ」に始まり、日記的章段一冊分が失われたと考えられている。

A「解説」（尊経閣叢刊丁卯歳記本『前田本まくらの草子』昭和2、育徳財団尊経閣文庫）

（塚本系統が）雑然と羅列しているのに対し、前田本の一冊（春はあけほのの冊）には「春は」に始まり……**先ず四季天文又は自然界の現象等**についてのべ、次に……**地文又は地理的な事項**について記し、次に「せきは」「むまやは」「はしは」「みささぎは」等**家屋土木等の事項**に及び、さらに……**動植物のこと、神仏に関すること、職業に関すること、人間の好尚に関すること**等に互って記し、しかもその間に整然として秩序ある分類と組織とを有する。

B「美論としての枕草子—原典批評の一つの試みとして—」（『国語と国文学』7—10、昭5・10／『研究枕草子』第五章「二 美の分類」昭38、至文堂）

とにかく**枕草子は学問的には類聚抄、芸術的には六帖の感化を受けて、特殊な分類法を用いたのではないかと思われるのである**。今前田家本の一冊目の項目を、その順序のまま記し、これに最も原形に近いとされている**十巻本の類聚抄の用いた部類の名称**をあて、さらに**六帖の標目を対照すれば次のようである**。（対照表は略す）……（古今六帖との）主なる差異点は、**枕草子の方に新しい項目がふえ、従って語彙の範囲が一層広がったこと**である。これは六帖の方が、設題に必ず証歌を示さねばならないと云う束縛があったのに対して、草子の方は、**和歌として不適切な題目であっても、散文として十分これを美的に表現し得る自由があったから**であろう。ただ六帖の第四冊に、恋・祝・別の三項があって、**和歌の従来の分類形式の面影を残している**にかかわらず、**枕草子にこの部類のないのは何故であるか**。恋愛と哀傷とは、後宮に於ける社交生活の根本的な部分であるにかかわらず、女性たる作者が、何故にこの題目を設けなかったかは、頗る不審としなければならぬ。或はこの事実が、かえって清少納言その人の境遇なり、性格なりを反映するのであるか、或は**かかる部分を「めでたき物」等、人間の情意に関する叙述の部分に含ませたつもりであるのか**、不明である。

C「清少納言枕草子解説 四 諸本」（岩波文庫『枕草子（春曙抄）』上巻、昭6、岩波書店）

（前田家本の）これ等の分類は、**和名抄以後の字書の体裁にならえるもの**と見るべきで**六条家の清輔・顕昭等の分類、順徳院の御分類等に近いものがあるから**、その頃整理されたものではないかとも考えられるけれど、それよりも清少納言それ自身が、かかる題系のもとに成ったと考える方が、より一層適切であろうと思われる。尤も前田家本そのものは、原作その儘の形ではなく、後人の整理したものには相違はないが、ただ**原本に最も近く整理されたものと考えたいのである**。

D『全講枕草子』下卷(昭32, 至文堂)「雲は」の「要説」と「解説 枕草子とその作者」

最初に構想されたものは、おそらくこの日・月・星・雲などの天体现象であったであろう。これは**天地玄黄とか日月星辰とかの、支那的な分類**であって、辞書的な書物を執筆しようと意図した作者が、当然採用したものと考えて誤りないと思われる。……この一群をつらぬくものは、大陸的な知性にもとづく「分類」の方式である。**和名抄や字鏡や白氏六帖などに見られる天地玄黄やあめ・つち・ほし・そらの体系**である。

Aにあるように、『塚本枕草子』(速水博司氏『塚本枕草子評釈』平2, 有朋堂に拠る)は、「春は曙の空」「頃は」「節は」「降るものは」「風は」「霧は」「木の花は」「花の木ならぬは」「草の花は」「花なき草は」「鳥は」「虫は」と続き、木草鳥虫の後に13段「山は」がある。「日は」「月は」「雲は」「雪は」「時雨・霰は」は92段～96段であり、「天部」を前にまとめようとはしていない。

Cの波線部は、引用していないがBでも述べられていた。田中氏が指摘されたように「原本形態に最も遠い改修本」とする楠道隆氏の説と対照的で、今日では後者が通説となっている。ただし、今日では、『塚本』や『前田家本』などの異本の編纂作業を、後人のさかしらとするのではなく、一つの〈読書行為〉の結果として積極的に評価するようになってきている。

またCで、『前田家本』の分類の平安後期の歌学書の分類との近さが指摘されているが、中国の類書への言及は一切無い。ただし、前稿でも引いたDには『白氏六帖』の名が見える。

B(及びC)の最初に見える『倭名類聚抄』は、上野氏が指摘されたように、初段及び2段に当る「歳時部」が「天部」に続かず後のほうにあるなどの理由で、清少納言がこれだけを見ていたのではないことは明らかである。池田氏は『前田家本枕草子』『十卷本倭名類聚抄』『古今和歌六帖』を対照しているが、『三卷本枕草子』『二十卷本倭名類聚抄』『藝文類聚』を加えた対照表を次節に掲げる。

またBにいう『枕草子』の語彙の広がりには、次節の対照表でも確認できるが、例えば第二帖「山」の「猿・鹿・虎・熊・むささび」などの「獣」、第三帖「水」の「魚・鯉・鮒・鱸・鯛・鮎・氷魚」などの「魚」等々、『古今六帖』にあつて『枕草子』に無いものももちろんある(例えば後代の『綺語抄』下の「動物部」も鳥・虫・貝・獣)。総称としても、『枕草子』では38段「草木、鳥虫」と跋文「木草、鳥虫」のみであるが、『三宝絵詞』序には「木草、山川、鳥獸、魚虫」という表現があつた。

Bの末尾の波線部については、池田氏は疑問を残しているが、正にその通りだと思われる。『前田家本』で「めでたきもの」の一冊にまとめられた、「人間の情意生活に関する事項の類聚」である「もの」型類聚章段が、『古今集』の「恋歌」や「賀歌」「離別歌」「哀傷歌」、『古今六帖』の第四帖「恋・祝・別」や第五帖「雑思」に当る。「～もの」として類聚された、無数の貴賤・老若・男女・緇素の悲喜・生死・雅俗・晴襲の〈私〉の集成が、前述した皇后・天皇による聖代賛美という〈公〉に奉仕するのである。跋文においても、「この草子」の〈私〉性に続いて、天皇・皇后に対して伊周が献上した一対の紙の片方を下賜されたという〈公〉性が述べられている。つまり、序・跋で〈公〉の枠組みを示している。それと同時に〈私〉が在り、その〈私〉は〈公〉に繋がっている。和漢、陰陽と共に、公私という点でも、『枕草子』は両義的なのである。

2. 類書と「は」型類聚章段の対照表

さて以下の表は、左端に、『藝文類聚』（上海古籍出版社版）のすべての部名と門名（括弧内、一部中略）を巻の順に掲げた。巻数は省略している。*印は備考である。なお、『初学記』は「統整理」されているので（前掲①参照）、『藝文類聚』を用いた。

次の列が、それに該当する『三卷本枕草子』の「は」型類聚章段の標題と、その章段番号（算用数字、「一」は「一本」）である。初段など、一般的には随想的章段とされるものも含む。『古今六帖』の項目にあるものを、表現が若干異なるものも含めゴシック体とした。一部重複がある。分類が不確かなものに？を付した。

中央の列は、『前田家本枕草子』の章段番号である（田中氏前掲書に拠る）。

右端には、『藝文類聚』の部門や『枕草子』の「は」型章段の標題に該当する、『二十卷倭名抄』（『元和古活字那波道円本』）と『十卷本倭名抄』（『箋注倭名類聚抄』）の部名と類名（括弧内）を挙げた。算用数字は第何部かである。『諸本集成倭名類聚抄〔本文篇〕』（昭43、臨川書店）を用いた。『十卷本』よりも『二十卷本』のほうが『枕草子』に近いといえるので、左に掲げた。

『藝文類聚』の部(門)	『三卷本枕草子』	『前田本』	『二十卷本』	『十卷本』
天上(天日月星雲風)	1春は 188風は 234日は 235月は 236星は 237雲は	1 12 7 8 9 10	天1 (景宿雲雨風雪)	天地1 (景宿風雨)
天下(雪雨霽雷電霧虹)	1春は ナシ霧は 233降るものは	1 11 13		
歳時上(春夏秋冬) *前本5は114後半「夏は」。	1春は 114冬は	1 6	歳時4 (春夏秋 冬の各三月)	×
歳時中(元正人日…九月九)	2頃は 8正月一日… 37節は	2 4 3	×	×
歳時下(社伏熱寒臘律曆)	×	×	調度22 (文書具) 曆	調度14 (文書具) 曆
地(地野園岡巖峽石塵) *原・森ナシ。 *関は倭名抄では居所部。橋・駅 と同じく道路具。	14原は① 107関は 108森は① 109原は② 163野は 194森は② 232岡は	18 31 19 18 17 19 16	地2 (山谷巖石林野 田園塵土) 居所13 (道路具)	天地1 (水土山石田野) 居所6 (道路具)
州(冀州揚州…并州交州)	63里は	36	国郡12	居所6
郡(河南郡京兆郡…会稽郡)	226駅は ?	32	居所13 (道路具)	(道路具)
山上下(総載崑崙山…交広諸山)	11山は 13峰は	14 15	地2 (山谷)	天地1 (山石)
水上(総載海水河水江水淮水漢水 洛水)	16海は 60河は	26 20	水3 (河海)	天地1 (水土山石)
水下(壑四瀆澗泉湖陂池谿谷 澗浦渠井氷津橋) *滝・島・浜・崎ナシ。 *津・渡り・橋は倭名抄では居所 部。	15淵は 18渡りは 36池は 59滝は 62橋は 162井は ナシ湯は 191島は 192浜は 193浦は 270崎は	21 33 23 22 34 24 25 30 27 29 28	地2 (山谷) 水3 (水泉河海涯岸) 居所13 (道路 道路具)	居所6 (道路 道路具)

『藝文類聚』の部(門)	『三卷本枕草子』	『前田本』	『二十卷本』	『十卷本』
符命(符命)	×	×	×	×
帝王一～四(総載・陳宣帝)	×	×	×	×
后妃(后妃)	×	×	×	×
儲宮(儲宮 太子妃附 公主)	×	×	×	×
人一～十八(頭目耳口舌髪鬚脚 臆/美婦人 賢婦人 老/言語 謡謡 吟 嘯 笑/聖 賢 忠 孝徳 讓 智…友悌 交友 絶 交/公平 品藻 質文/鑑誠/諷 諫/説 嘲戯/ 言志/行旅/遊覽/別上/別下 怨/贈答/閨情/ 寵幸 遊俠 報恩 報讎 盟/懷旧 哀傷)	206見物は ?	76	形体8 (頭面 耳目 鼻口毛 髪 身体 筋骨肌肉 蔵府 手足茎垂)	形体3 (頭面 耳目 鼻口毛 髪 身体 臓腑 手足 茎垂)
人十九(妬 淫 愁 泣 貧 奴 婢 傭保)	51雑色隨身は 52小舎人童 53牛飼は 56若き人ちごども…?	64 65 66 68	人倫6 (老幼 微賤)	人倫2 (男女)
人二十・二十一(隠逸上/隠逸下)	×	×	×	×
礼(礼 祭祀 郊丘 宗廟…釈奠)	17陵は 227社は	35 42	調度22 (葬送具) 陵墓	調度17 (葬送具) 陵墓
楽一～三(論楽/楽府/舞 歌)	201遊びは 203舞は 262歌は	85 77 80	×	×
楽四(琴 箏 篋篋 琵琶…笛 箏)	204弾くものは 205笛は	78 79	術芸9(琴瑟 管 箏 曲調類)	調度14 (音楽具)
職官一～六(総載 諸王 相国丞相 冢 宰/太尉…刺史 尹 太守 令長) *女官ナシ。	164上達部は 165君達は ナシ受領は 166権守は 167大夫は 169女は ? 一24官仕え所は	69 70 71 72 73 67 74	職官11 (職名 官名)	人倫2 (男女)
封爵(総載…婦人封 尊賢継絶封)	×	×	×	×
治政上下(論政 善政…奉使)	×	×	×	×
刑法(刑法)	×	×	×	×
雑文一～三(經典 談講 読書 史伝 集 序/詩賦/七 連珠)	66集は 67歌の題は 198文は 199物語は	83 81 82 84	×	×
雑文四(書 檄 移 紙 筆 硯)	一12薄様、色紙は 一13硯の箱は 一14筆は 一15墨は	100 101 102 103	調度22 (文書具)	調度14 (文書具)

『藝文類聚』の部(門)	『三卷本枕草子』	『前田本』	『二十卷本』	『十卷本』
武(将帥 戦伐)	×	×	×	×
軍器(牙 剣 刀 七首 鉄 弓…)	19 たちは	ナシ	調度 22 (征戦具)	調度 14 (征戦具)
居所一～四(総載/宮 闕 台 殿 坊 門 楼 櫓 観 堂 城 館 宅 舍 庭 壇 室 斎 廬 道路)	19 たちは 20 家は ナシ夏のしつらひ ナシ冬のしつらひ 195 寺は 227 社は 271 屋は	ナシ 39 40 41 43 42 38	居所 13 (居宅 居宅具 道路)	居所 6 (屋宅 屋宅具 道路)
産業上下(農 田 園 圃 蠶 織 鍼 市/ 田 獵 釣 銭)	12 市は	37	人倫 6 (工商 漁獵)	人倫 2 (男女)
衣冠(衣冠 笄 蟬 玦 珮 巾 帽 衣裳 袍 裙 襦 裘 帯)	ナシ東帯は 263 指貫は 264 狩衣は 265 単は 266 下襲は — 6 女の表着は ナシ夏の表着は — 7 唐衣は — 8 裳は — 9 汗衫は	88 91 90 ナシ 89 ナシ 93 94 95 ナシ	装束 21 (冠帽 衣服 腰帯)	装束 10 (冠帽 衣服 腰帯)
儀飾(節 黄 鍼 鼓 吹 相 風 漏 刻)	×	×	×	×
服飾上下(帳 屏 風 幔 簟 蓆 席 案 几 杖 扇 塵 尾 枕 被 褥 如 意 胡 牀 火 籠 香 鑪 步 搖 釵 櫛 囊 鏡 襪)	267 扇の骨は 268 櫛扇は — 17 櫛の箱は — 18 鏡は — 21 昼は	96 97 105 104 107	装束 21 (冠帽具 履襪) 調度 22 (僧坊具) 調度 23 (服玩具 容飾具 屏 障具 坐臥具 行旅 具)	装束 10 (冠帽具/履襪) 調度 14 (僧坊具 服玩具以下 同左)
舟車(舟 車)	30 檣櫓毛は① — 22 檣櫓毛は②	92 92	舟 14 車 15	舟車 7
食物(食 餅 肉…酪 蘇 米 酒)	×	×	飲食 24	飲食 11
雑器物部(鼎…盤 樽 卮 杯 盃)	×	×	器皿 23 (金器 木器 瓦器)	器皿 12 (同左)
巧芸(射 書 画 囲 碁…象 戯)	202 遊びわざは? ナシ女の遊びは? — 19 蒔絵は ?	86 87 ナシ	術芸 9 (射芸 雑芸)	術芸 5 (射芸 雑芸)

『藝文類聚』の部(門)	『三卷本枕草子』	『前田本』	『二十卷本』	『十卷本』
方術(養生ト筮相疾医)	181病は ?	75	形体8(病)	人倫2(男女) 疾病4(病)
内典上下(内典/寺碑) *初学記は道积部で、仏菩薩僧寺もあり。	31説経の講師は 122修法は 159読経は 168法師は 195寺は 196経は 197仏は ナシ陀羅尼は 200陀羅尼は ナシ法華経は ナシ時は	63 61 58 62 43 55 53 56 57 59 60	×	×
靈異上下(仙道/神夢魂魄)	269神は	54	鬼神5 (神靈 鬼魅)	天地1 (神靈)
火(火…燭庭燎竈薪炭灰煙)	—20火桶は ?	106	燈火19	燈火13
薬香(薬空青芍薬百合兔絲女蘿 款冬天門冬芥苜薯預菖蒲朮) 草上(草香附菊杜若…蜀葵薔薇藍 慎火卷施) 草下(芙蓉菱蒲萍苔菰荻著茗 茅蓬艾藤菜蔬葵薺葱蓼)	64草は 65草の花は	47 46	飲食24 (薑蒜) 菓蔬26 (蔬) 菜蔬27 (水菜園菜野菜) 草木32 (草苔蓮葛)	飲食11 (塩梅) 菜蔬22 (菜) 果蔬23 (果蔬) 草木24 (草苔蓮葛)
宝玉上下(宝金銀玉珪璧珠貝 馬瑙瑠璃車渠瑋瑁銅)	—16貝は ?	ナシ	宝貨17	珍宝8
百穀(穀禾稻…粟豆麻麦)	×	×	稻穀25	稻穀21
布帛(素錦絹綾羅布)	—10織物は —11綾の紋は	98 99	布帛20	布帛9
果上下(李桃梅梨柑橘櫻桃石 榴柿榲棗杏栗胡桃林檎甘藷 沙棠椰…芭蕉甘蔗瓜)	35木の花は	44	飲食24 (薑蒜) 菓蔬26 (菓蔬芋)	飲食11 (塩梅) 果蔬23 (果蔬)
木上下(木花類附松柏槐桑榆桐 楊柳檉椒梓桂楓…合歡杉并間 荊棘黃連梔子竹)	38花の木ならぬは	45 (木は)	草木32 (竹木)	草木24 (竹木)
鳥上中下(鳥鳳鸞鴻鶴白鶴黃鸝 玄鵲附雉鷓孔雀鸚鵡青鳥雁鶩鴨 鷄山鷄鷹鷓鳥鶻雀鶩鳩鴟反舌 倉庚鷓鴣啄木…)	39鳥は	48	羽族28	羽族15

『藝文類聚』の部(門)	『三卷本枕草子』	『前田本』	『二十卷本』	『十卷本』
獸上中下(馬・牛・驢・駱駝・羊・狗・豕・象・犀・熊・鹿・麋・兔・狐・貉・獺・獺・猴・果然・狴・狴・貂・鼠)	48馬は 49牛は 50猫は	50 51 52	牛馬 16 (牛馬類) 毛群 29	毛群 16 牛馬 17
鱗介上(龍・蛟・蛇・龜・鼈・魚)	×	×	鱗介 30	龍魚 18
鱗介下(螺・蚌・蛤・蛤蜊・烏賊・…)	一16貝は	ナシ	(龍魚・龜貝)	龜貝 19
虫豸(蟬・蠅・蚊・蟬・蚊・蚊・蝶・螢・火・蝙蝠・叩頭虫・蛾・蜂・蟋蟀・尺蠖・蟻・蜘蛛・蝗・蝻)	41虫は	49	虫豸 31	虫豸 20
祥瑞上下(祥瑞・慶雲・甘露・木連理・木芝・龍鱗・鳳皇・鸞・比翼・鳥・雀・鸞・鳩・雉・馬・白鹿・狐・兔・龜・魚・鼎)	1春は	1	×	×
災異(旱・祈雨・蝗・螟・蝻・賊・蛾)	×	×	×	×

3. まとめ

3.1. 森羅万象、類書との近さ

前節の表から、まず、『枕草子』「は」型類聚章段は、『藝文類聚』の部門のほとんどに該当すること、また、234段「日は」から237段「雲は」や、107段「関は」から109段「原は」などのように、各部の要素(門)に当る章段が雑纂形態においても連続することが多いことが確認できる。正に「森羅万象」が取り上げられているといつてよいだろう。

もちろん、「符命部」「帝王部」「后妃部」「儲宮部」「人部」、「封爵部」「治政部」「刑法部」、「武部」、「儀飾部」など、『藝文類聚』のみにあるものも少なくない。ただし『枕草子』では、その一部が他の日記的章段や、「もの」型類聚章段、随想的章段で取り上げられている。

また、「食物部」「器物部」、「宝玉部」「百穀」、「獸部」「鱗介部」など、『倭名類聚抄』にもあって、『枕草子』「は」型類聚章段のみが欠くものについても、同様に他章段で描かれている(例えば「水晶」「青ざし」「犬」「海月」)。

ただし、『藝文類聚』と近いといつても、『藝文類聚』が『枕草子』の出典そのものであるという意味ではない。前稿で取り上げた初段については、首巻という位置及びその要素(門)の共通性から、類書の「天部」の影響がうかがえた。しかし、本稿で見えてきた他の「は」型章段については、あらゆるものを類聚し、書こうとした際の、範囲や取り上げ方といった発想の枠組みに『藝文類聚』と共通するものがある、といふべきだろう。対象が現に存在するものだからといつて、必ず近似するとは限らないのである。

3.2. 倭名抄との距離、二十卷本との若干の近さ

『藝文類聚』と『枕草子』にあって『倭名類聚抄』に無いものについて、順に見ておく。註は池田氏のBの対照表の中にあるものである。

「歳時部」…池田註「倭名抄にはなけれども、口遊・綺語抄・和歌童蒙抄には「春・夏・秋・冬」、色葉字類抄には「歳時」とあり。」確かに、『二十卷本』には第四「歳時部」に四季と暦月がある。しかし、上野氏が指摘されたように、後のほうにある。また、節日は一切無い。

「州郡部」…池田註「みささぎ二十巻本に見ゆ。色葉字類抄に「諸寺」「国郡」の部あり。」「みささぎ」については、『二十巻本』巻第十四・調度部（二十二）中・葬送具百九十だけでなく、『十巻本』巻第六・調度部（十四）下・葬送具九十九にも「山陵」と「墳墓」がある。ただし、『二十巻本』の「国郡部」が『十巻本』には無い。

「楽部」…そのうち楽器はある。池田註「二十巻本に「楽曲」、口遊・童蒙抄に「伎芸」「音楽」の部あり。」

「雑文部」…そのうち「文書具」はある。池田註「口遊に「書籍」の部あり。」

「内典部」…『初学記』は「道釈部」。池田註「和歌童蒙抄に「仏神」、色葉字類抄に「諸社」「諸寺」の部あり。」「口遊に「内典」、綺語抄・類聚古集に「神仙」、童蒙抄に「仏神」の部あり。」

このように、「歳時」以外についても、『枕草子』の「は」型類聚章段は、『倭名抄』以外の要素を持っている。池田氏が前掲Bで『古今六帖』との関係で言われた散文の自由（「和歌として不適切な題目であっても、散文として十分これを美的に表現し得る自由があった」）は、類題歌集だけでなく、名詞類聚の辞書（ただし『口遊』などとは異なり官人向けではない）との関係においてもいえるのである。

3.3. 前田家本の分類について

最後に、『前田家本』の分類・排列を見ておきたい。池田氏はCで「和名抄以後の辞書の体裁にならえるもの」とも「六条家の清輔・顕昭等の分類、順徳院の御分類等に近いものがある」とも言われていた。

歳時 1段～6段「春 頃 節 正月一日 夏 冬」

天 7段～13段「日 月 星 雲 霧 風 降る物」

地 14段～19段「山 峯 岡 野 原 森」

水 20段～30段「川 淵 滝 池 井 湯 海 浜 崎 浦 島」

居所 31段～41段「関 駅 渡り 橋 陵 里 市/屋 家 夏のしつらひ 冬のしつらひ」

寺社 42段「社」、43段「寺」

植物 44段～47段「木の花 木 草の花 草」

動物 48段～52段「鳥 虫 馬 牛 猫」

仏神 53段～63段「仏 神 経 陀羅尼 陀羅尼 読経 法華経 時 修法 法師 説経師」

人倫 64段～68段「雑色・隨身 小舎人童 牛飼 女 若き人・子どもなど」

官職 69段～74段「上達部 殿上人 受領 やどりつかさの権守 大夫 宮仕へ所」

疾病 75段「病」

見物 76段「見物」

諸芸 77段～87段「舞 弾く物 吹く物 歌 歌の題 書 集 物語 遊び 遊びわざ 女の遊び」

装束 87段～95段「束帯 下襲 狩衣 指貫 檳榔毛 夏の表着 唐衣 裳」

服飾・調度 96段～107段「扇の骨 檜扇 織物 紋 薄様 硯の箱 筆 墨 鏡 櫛の箱 火桶 盥」

31段の「関」は『藝文類聚』では「地部」、33段の「渡り」と34段「橋」は『藝文類聚』では「水部」にある。これらは『倭名抄』では、「駅」と同様に「居所部」にある。これらの分類においては、『藝文類聚』からは遠く、『倭名抄』に近いといえる。

しかし、『倭名抄』とは異なり、木草鳥虫で終らず、人事部を後にまとめている。この早い例としては、

『万葉集』卷七「雑歌」の「詠天 詠月 詠雲 詠雨 詠山 詠岳 詠河 詠露 詠花 詠葉 詠蘿 詠草 詠鳥 思故郷 詠井 詠倭琴」がある。また、池田氏ご指摘の清輔の歌学書の一つ『奥義抄』二十三「物異名 付十二月名」も次のような順になっている（『日本歌学大系』に拠る）。なお『本朝無題詩』も同様である。

「天 日 月 雨 風 霧 樹雪落 水上雪」 天
「地 山 峯 野 河 高峯 海 塩海 水海 巖 道 庭水」 地・水
「京 平城宮 内裏」
「春 夏 朝 時 暁」 歳時
「腕」
「草 壁草 花 果 薦 鶯 鶴 鹿 猿 蚕 蛙 蜘蛛」 植物・動物
「神」 神
「帝 東宮 中宮 大臣 中少将 衛門 兵衛 男 女 婦 下人 賤男 盗人」
「別 つらき事 夢」
「書 筆 簾 和琴 酒 人形」
「正月～十二月」

なお、清輔の『和歌初学抄』は人事が前にあり、『綺語抄』も下が「動物部・植物部」、『和歌童蒙抄』も第七「草部・木部」、第八「鳥部」、第九「獣部・魚貝部・虫部」となっており、『倭名抄』と同じである。『藝文類聚』や『初学記』などの類書も同様である。

よって、『前田家本枕草子』の分類は、『藝文類聚』からはかなり遠いといえる。ただし『倭名抄』にならったとまではいえず、管見に入った限りでは、清輔『奥義抄』の物名の挙げ方に最も近かった。さらに多くの周辺の和漢の書と比較・対照し、また各類聚編纂物の性格を考慮することで、分類意識の継承や、その要因を明らかにすることができるだろう。